



どんなに強く目を瞑っても、右へ左へと寝がえりをうってみても、眠りは僕に訪れることはなかった。諦めてベッドから降り、カーテンを開けた。向かいの家のトイレの電気が付きっぱなしなのが気になった。まだ、空は暗い。時計を見れば朝の五時を回ったところだった。出勤まで二時間ある。小さなテレビの電源を入れてからPSⅢのコントローラーを手にした。ゲームでもやって時間を潰そう。緊張をほぐすために僕は、ロールプレイングゲームの勇者になった。

ベラベラしゃべりすぎる人間は嫌いだ。

僕がそうだから。

口は災いの元なんて、昔の人はよく言ったものだ。僕は口でいろいろなものを失って生きてきた。噂話を楽しんで友を失い、暴言を吐き恋人が去り、噤んでは親を困らせる。

あまり人との付き合いのない職場がいい。

愛想をふりまかなくていい職場がいい。

就職氷河期なのに、すぐに就職できたうえに、みなし公務員というおまけも付いてきた。

僕は、卒業までの残されたたくさんの時間を、ロールプレイングゲームの中で過ごした。

仲間を作り、仲間を失い、仲間を呪文で生き返らせて、敵を倒した。

そのゲームの続きを初出勤の朝にまでやっている。

窓の外が明るくなってきた。階下はにわかには人の動いている気配がしてきた。父親と母親が起きだしたのだろう。子機電話の呼び出し音が鳴るまでに、下に降りよう。そう思いテレビの電源を落とした。

広い駐車場の隅に車を止め、職員用の出入り口に向かってゆっくりと歩きだした。冷たい朝の空気を胸いっぱい吸い込んでから、勢いよくドアを開け、挨拶をして一步を踏み出した。

僕の教育担当になったのは、来年定年を迎える重里さんと、三年前に入った中堅の八巻さんだった。この二人と僕とでチームになり、シフトをこなしてゆく。

「佐藤健二です。よろしくお願いします」

普段揃うことのない全職員の前で、たったひとりの新入社員の僕は挨拶をした。

「シフトを組むもん以外は、なかなか顔を合わせることがないだろうけど、いろいろ指導してやってくれよ。今日も仕事が入っているから、そろそろ持ち場に戻るように」

社長は僕の肩を抱きながらみんなに紹介をし、職員はまばらな拍手を贈ってくれた。

「サトケンでいいな」

重里さんは僕を手招きして、まずはそう言った。それから「おれは重さんでいいから」と付け足し、さらに隣にいた八巻さんを指さして「こいつは無口だから、つぐむさんってみんなと呼んでんだ」と笑った。

僕は曖昧にほほ

笑んで、少しだけ首を縦に振った。重さんはまず、僕に台車を動かす練習をするようにと命じた

。

「これをスマートに動かせないと、恥かくからな」

重さんに言われるまま、僕はステンレス製の台車を広い駐車場で前へ、後へと動かした。細い年寄りの重さんには簡単に動かせた台車が、思う通りには動かない。気が付くと汗が額から滲みでていた。

「汗をかいたらだめだ。泣くのもだめだ。とにかく我々は、無機質でいないといけない」
重さんは煙草をふかしながら、よろよろと動く台車を笑って見ていた。

「今度は台車にものを乗せて運んでみな」

いつのまにかつぐむさんが用意していた段ボールをいくつも台車に乗せられた。

「実際はもっと重いのも、もっと軽いのもあるんだからな」

つぐむさんは、段ボールを積みながら初めて僕に話しかけてきた。

ハンカチで汗を拭いて空を見上げると、抜けるような青空。お線香のコマーシャルを思い出す。コツをつかめば台車は軽く動くことが分かった。がむしゃらに力を加えればいいのではない。僕は本番をイメージした。緊迫した空気の中、失敗することなく丁寧に運ぶことができるのだろうか。手の平に汗が吹き出した。ズボンで拭う。すぐに手を台車のグリップに戻した。こんな動作は許されないのだ。

つぐむさんが手招きをしている。台車を寄せて、小走りについてゆく。この職場では先輩に呼ばれたら、速やかについてゆかなくてはならない。予想外に体育会系の仕事場なのだった。

くたくたになって家に戻ると、母親がお風呂を沸かしてくれていた。一番風呂はいいから、最後にお湯を抜かないで置いてくれと頼んで、まずはシャワーだけを浴びた。汗をかいた体に、熱めのお湯が気持ちよかった。

全身の筋肉が張っているのが分かる。一日台車を動かただけで終わってしまった。

義務つけられている日報に、自己紹介と台車の練習とだけ書いて閉じてきた。他に書くべきことは何一つない一日だったのだ。

その日は重さんが苦笑いをしながら言った。

「これ、この仕事やるとさ、次の日から来なくなっちゃう奴が多いから伸ばし伸ばしにして来たんだけど、お前ももうそろそろ仕事の雰囲気にも慣れてきただろ？」

重さんの脇にある掃除機から目をそらさずに僕はコクリと頷いた。いつまでも台車操作と駐車場やロビーの掃除ばかりしても居られない。唾を二回飲み込んで重さんの後に続いた。

古い掃除機は重たくて、電気コードが少しダランと伸びていた。いくら巻き戻しのボタンを押しても戻らない。年季がはいっているのだ。

火葬炉の窯に残っている塵や細かい骨を掃除機で吸い取る。誰の骨か、誰の塵かはもう分からない。ただ、砂のようになった灰色や白い骨のなかに、時おりキラリと光る乳白色の骨を見つけると、美しいと思う。

思わず手にとってみたくなる。僕の体にもこんなに綺麗な骨があるといいな。そう願いながら吸い取る。大きな掃除機の音が曇天に吸い込まれてゆく。

僕の横で、つぐむさんは「サトケンは嫌にならないのか？」と小さい声で尋ねてきた。僕は、別に嫌じゃない。そう答えた。誰もが最後はこうなるのだ。呪文を唱えたって元には戻らない。ただ、できればすべての骨が骨壺にきちんと納められるようにと、僕は願う。掃除機に吸い込まれる骨が、少しでも無くなりますように。

渡されたマニュアルの練習を何度も繰り返した。明日は、初めて遺族の人たちと直接触れ合う仕事なのだ。

「これが最後のお別れでございます」

(導師様に一礼をして)

「一同合唱願います」

(左に一步避けてから)

「南無阿弥陀仏」

(喪主様に目を合わせて)

「お別れのボタンをお願いいたします」

(喪主様を取り乱していたら、その配偶者など近しい人をお願いをする)

この一連の動作が終わると、遺族たちは控え室で茶毘にふされるのをじっと待つのだ。

僕の練習相手をしていた重さんは、何度も僕の体の動きを両手で止めては「ここはもっとスマートにエスコートしないと」

「これはスマートではないよ。導師様は慣れてるから、導師様の動きを見ながら、サトケンが付いていくくらいでいいんだ」と事細かに注意をしてくれた。

何度も見ていた重さんの仕事ぶりはさすがにベテランで、どんな動きも自然で、必要な作業はするのに、いつの間にか気配を消しているような、無機質な感じがするのだった。僕は、練習だけでも汗だくで、本番になったら、どんなへまをするかわからない。つぐむさんも重さんの仕事ぶりには惚れ惚れする時があると、酒を飲んだ席で珍しく饒舌に語っていた。なんでもスマートに、というのが少々うるさいけれど、それ以外はいいい人なんだと、だらだらとイモ焼酎を飲みながら自慢げに話してくれた。

「明日は、忙しいからな。慌てずに急いで、なんでもスマートに行動しろよ」

重さんは僕の肩を両手で解しながら、つぐむさんの時は大変だったんだよ、と笑った。つぐむさんは、顎で僕を呼ぶと、今日は少し付き合えよ、と言い残しロッカーへ着替えに行ってしまった。ぼくも慌てて後を追ひ、重さんに頭を下げた。

つぐむさんはもともと酒が好きではないらしい。付き合えと言われた僕はすっかりアルコールを体に入れるものだと思い込んでいたためか、ジャズの流れる喫茶店のお手拭きで顔を擦り、少しがっかりした。

「酒だと思ったか？」つぐむさんは僕の心を見透かしたようなことを次々と言った。

「明日は、できれば少人数の遺族で、みんなが大人しく優しく、導師様はいつもの顔なじみだ
といいな、とか思ってんだろ」

僕が返事に詰まっていると、勝手にブラジルを二つ注文して煙草に火をつけた。

「俺もそうだったよ。でもな、思い通りにはいかないのが世の常ってやつだ」

僕は頷いてから、重さんの言葉を思い出した。「つぐむさんは、初めての時はどんなんでした」

僕は煙草を吸わないので、冷たい水を一気に飲み干して返事を待った。

つぐむさんは、三口ばかりたばこを吸うと、まだ長く残っているのに灰皿でもみ消した。

「短く吸うと、肺がんになる気がする」

そう笑って、煙草をさらに一本取り出し、軽く口に銜えると、慣れた手つきで火をつけた。ゆっ

くりと吐き出された煙は、エアコンの流れに乗って、形を変えながら天井に向かってやがて消

えた。煙の行方を目で追っていたつぐむさんは、軽くため息をつく口を開いた。

「俺の時は、何も失敗はなかったんだよ。ただ、俺が勝手に切れたんだ」

「非嫡出子って意味分かるか？」つぐむさんは僕の顔を覗きこみながら小声で言った。

首を横に振ると、小さくため息を漏らして「愛人の子供ってことだよ」と教えてくれた。

「なんでぼくが非嫡出子を知らないからって、つぐむさんはため息をつくんですか」先ほどのため息に馬鹿にされた気分になった僕は、しどろもどろ抗議をした。

「すまん。癖だよ。小さいため息は癖なんだよ。深い意味はないんだ」

そういうつぐむさんを睨んだまま、首を縦に振った。

「で、俺の初仕事は友人の父親の葬儀だったんだ。友人は、非嫡出子だった」

つぐむさんは、当時を思い出すように目を閉じて、話を続けた。

「最初は、自分の仕事に緊張していて友人がいることにも気付かなかったんだ。滞りなく進行して、喪主である奥さんが、ボタンを押した。静かに棺は焼却炉に吸い込まれて、みんな控え室に行ったんだ。その一番後ろを友人が少し遅れて歩いていったんだ」

ボタンを押して、導師様の読経が終わると、遺族は導師様を先頭に一番広い控えの間に流れて行った。喪主はしきりに黒い扇子で顔の周りを仰ぎ、少し濃いめの化粧が落ちるのを防いでいたし、長男らしき男は、常に携帯電話でメールの送受信をしていた。娘は青白い顔をしていて、今にも倒れてしまいそうだった。一番憔悴しているように見えたんだ。一番後ろを歩いていった友人は、泣きはらした目がうつろだった。誰と話すこともなく、遠慮がちにみんなについて歩いていた

事務員の子が控室にお茶を淹れに行くと、友人だけが、離れたテーブルにいたと教えてくれた。

俺は、そっと入口に近づいて手招きをしたんだ。彼はゆっくりと立ち上がり、廊下に出てきた。

「今日は世話になったな」

彼のほうから話を始めた。俺はただ頷いて、初めての仕事だったということを端的に伝えた。挨拶をしたらすぐに別れようと思っていたのだが、彼の方がなかなか部屋に戻ろうとしない。控え室では皆の話声が大きくなり、廊下にも聞こえてきた。日本酒を飲んだらしい男が、乱暴な声を

上げ始めた。悲しい席だからこそ、悪酔いしてしまう人も多い。俺は事務員の子に様子を窺ってくるように伝えて、手に負えないようなら対応しようと思っていた。男は友人の名前を叫びだした。

「遺産泥棒がいるぞ」と声が続いた。

「認めないぞ、親父の息子は俺一人だ」という声と周囲の人間が制止する声が入り混じってホールに響いた。

「俺のことだよ。遺産泥棒は」友人は悲しそうにほほ笑んだ。「認知されている子供ってことだ。相続権があるらしくてな。ずっと揉めてる。金が欲しいわけじゃない。ただ、あんないい草が気に入らないんだ」

控室の声はしつこく友人の名を呼び捨てにした。周囲の人間も真剣に止める様子はない。「いきなり息子が二人いましたと言われてもねえ、みんな困るわよね」

嘲笑する声が聞こえた。俯いて数珠を握った手に力を入れた友人を見た。

俺は、控室に行ったんだ。メールをピコピコやりまくってんのも、気にいらねえ。すべてが気にいらねえ。他の方の迷惑になるから、静かにしろと、言ったんだ。酔っ払った男は、俺に突っかかってきた。酒でも飲まなきゃ、こんな長い時間焼き待ちしてられないと、そう言ったんだ。俺は、怒鳴ったよ。焼かletたくて焼かれるわけじゃねえよ。お前もいつか同じ姿になんだよ。酒を飲むとの騒ぐのを混同するな、ここは酒場じゃねえと、怒鳴っちゃったんだ。

僕は、声が出なかった。つぐむさんが怒鳴り込むという姿が脳裏にちっとも浮かばなかった。しかし、怒鳴りこみたくなる気持ちは理解できた。

「で、どうしたんですか」

「どうもしねえよ」

「叱られませんでしたか？」

「友人が、俺の後にさらに切れたんだ。相続を放棄するつもりでいたが、こんな家族に持っていかれるくらいなら、きちんと分けてもらうことに決めました」と。そうしたら、連中、顔を青くしたり赤くしたり。最後には導師様が一喝して終わったよ。導師様も日本酒を飲んでたものだから、ゆでたこみたいな顔して、「醜い言い争いは、後でやりなさい」と怒鳴って、とりあえず収まったんだ。

あんなに控室は大騒ぎしたのに、お骨上げは神妙に行われたし、喪主は涙をこぼしながら一番大きな骨を納骨した。友人もきちんと骨壺に骨をおさめることができたんだ。でも、俺は始末書を書かされたよ。重さんは一週間口をきいてくれなかった。立場をわきまえるべきだった。個人的なことに顔を突っ込むべきではなかったんだ。それから俺は、余計なこと話さなくなった。だから、つぐむさんになったわけ。

冷めたコーヒーを一気に飲み干すと、軽く手を上げてウエイトレスを呼び、ハウスブレンドを二つ追加注文した。僕も一気にコーヒーを胃に流し込んだ。

「おまえの仕事は、スマートに運ぶといいな」

唇の端っこに笑いを含んで、つぐむさんは眉を上げ下げしながら「スマートに」と繰り返した。

初出勤の朝と同じように、眠れなかった僕はテレビゲームで勇者のレベルを上げた。大きな鈍を振りまわして敵をなぎ倒し、仲間の呪文で傷ついた体を癒してもらい、ひたすらレベルの高い敵を探してフィールド上を歩きまわった。以前はそれで気が晴れた。しかし、この頃の僕はゲームをしていても、気分がすぐれることはなく、疲労感をおぼえる。

カーテンからこぼれる朝日が、部屋の埃に反射する。ゲームの電源を落とし、一階へ降りた。階段下収納から掃除機を取り出し、窓を全開にしてからスイッチを入れた。この部屋には、綺麗な骨の欠片は落ちていない代わりに、綿埃と、お菓子の食べカスそれから切った時に飛ばしてしまったのであろう、干からびた爪が落ちていた。爪は吸い込まれる時に、管楽器のような音色を立てた。

家にも落ち着かなかった。頭の中ではマニュアルがぐるぐると回り、御鈴の澄んだ高い音が聞こえる。母親が用意してくれていた朝食には手を付けずにオレンジジュースを二杯飲んで家を出た。

事務所には、重さんが既に出社していた。「おう」と軽く右手を上げて、急須を左手で持ち上げて見せた。

「享年三歳」

重さんは湯呑を僕の左わきに置きながら、小さいため息を漏らした。

「サトケンの初仕事は、小さな子供だよ。でもな、絶対に、絶対に泣いちゃ駄目だ」

僕は返事ができなかった。息が詰まる。湯呑の中のお茶を飲みたいのに、手が強張って動かなかった。

「百歳の老人でも、三歳の子供でも、同じ重さの命だ。子供だから泣くのは、おかしいだろ」

重さんは事務的に続けた。

「焼くのは、俺がやってやる」

僕は、首を振った。

「お前じゃ、まだ無理だ。子供の骨は細くてな、適当な焼き方したんじゃ、形が何も残らん」

事務所のドアが開き、つぐむさんと事務の女性が一緒にやってきた。あいさつをしようとしても声が出ない。

重さんと僕の緊張した顔を見て、つぐむさんは黙って僕の肩を二回叩いた。

その子の乗った霊柩車が静かにブレーキをかけて会場前に停まった。

遺影と位牌を父と母がそれぞれ手にし、六歳くらいの女の子が祖母らしき中年の女性に手をひかれて車を降りた。

遅れてやってきた白いセダン車から導師様と数名の喪服姿の親戚が降りる。僕は喪主に向かって深くお辞儀をしてから、遺影を見つめた。

「これで全員揃っていますので」

いつの間にか隣に歩み寄っていた導師様が囁いた。

事務の女の子に目で合図を送り、一緒にロビーに向かった。いつの間にか台車には小さな棺桶が乗せられている。さっそく仕事を一つ飛ばした。つぐむさんは黙って台車をロビーに運んでく

れた。

導師様は慣れた様子で指定した二号機の前の小さな祭壇に位牌と遺影を並べ、読経を始めた。読経が済んだら、僕は二号機の入口の台車を、小さな子供の体を炎の中に入れなければならない。白い手袋が汗で湿っぽい。額を流れる汗が、冷たい。カラカラに乾いた口の中にはオレンジジュースの香りが甦った。

ボタンを押したのは父親だった。母親はその父親の手を押さえて嗚咽した。周囲の人間はその嗚咽にどう答えたらいいものかわからないのだろう。静まり返っていた。凜の音がいつまでもロビーを木霊する。父親は母親の手を軽く握りながら、さよならのボタンを押した。

控室に案内をして、僕は駐車場に逃げだした。事務所に戻り、白々しく肩を叩かれるのも、知った顔で迎え入れられるのも耐えがたい。身の置き場がこの火葬場に見つからない。それだけのことだ。

涙は出ない。

ポケットに忍ばせていたガムを噛みながら、庭の外れに群生している彼岸花を見つめた。あんな不吉なイメージの花は、刈ってしまえばいいのに。彼岸花に向けて大鉈を振りまわす。脳内での僕は果敢で、次々と花の首をはねた。彼岸花の茎から赤い血が流れ出る。

くちゃくちゃとガムを噛みながら、肩で息をしている自分に気付いた。大暴れした後のように興奮している。誰も僕に呪文をかけてくれない。その場にうずくまり、アスファルトを見つめた。あまりに、小さい棺だった。きっと今ごろ、重さんは小さな丸い覗き窓を時おり開けては、炎の調節をしているのだろう。骨がボロボロに砕けないように、細心の注意を払い、スマートにこなすはずだ。

ふと、彼岸花の方へ目を向けると、女の子が立っていた。まるで彼岸花が炎のように見えた。少女が燃やされている、そんな馬鹿げた幻想が頭をよぎり、その子の方へ勝ってに足が動きだした。

「お父さんとお母さんと一緒にいなくていいの？」

そっと声をかけると女の子はこちらを見ることなく「みんな泣いてるから」と答えた。「あのさ、あの大きな木が怖いね」女の子はそう言うと、駐車場の脇にある大木を指さした。彼岸に咲く花の方がよっぽど怖いよ、そう言いかけてやめた。彼岸花という名前に囚われているから、花の美しさが分からないだけなのだ。

「どうして怖いの？」

「だって、ほら」

そう言いながら女の子は大木の影の中に足を踏み入れて「暗いからね」と呟いた。

腕時計に目をやるとボタンを押してから一時間が経過していた。そろそろ戻らなくてはいけない。

「部屋に戻ろうよ」

女の子は首を小さく縦に振って後に付いてきた。

ゆっくりと静まりかえったロビーへ二人で向かった。

炎の燃える音が小さく響いている。重さんが腕を組んで、僕らを待ち構えていた。

「あの木の影が大きすぎて、幼い子には怖いそうです」

重さんと目を合わせないように、開口一番にそう伝え、女の子に待合室まで行くように、そっと背中を押した。

「あと、一時間もすればサトケンの仕事だからな」重さんは腕を組んだまま静かに言った。一号機の脇では、遺骨をつぐむさんが静かに骨壺に納めていた。手伝わなくてはならない。先ほどの助けを返さないと。僕は向きを変え歩み始めた。

「おい」

重さんの声が背中から追いかけてきた。僕は振り返らず立ち止まった。

「あの子、あの木が怖いっていったのか」

黙って頷くと「そうか。大きくなりすぎたかな。影が伸び過ぎて、幼い子には怖いのかもかもしれない」と呟き、重さんも事務室へと戻っていった。

僕はつぐむさんの納骨作業が終わるのを待って、ワゴン車を裏へと回した。少し残った砂のような骨の欠片を、箒で掃いてゴミ箱捨てる。

「逆縁って辛いよな」

つぐむさんは、ワゴンを雑巾で磨きながら、二回ほど同じことを呟いた。

二号機の炎が消え、変わり果てた子供の姿が目の前にある。

困ったことが起きた。重さんが注意を払ってくれていたにも関わらず、見つからない。遺族の前で、途方に暮れた。

導師様の読経の中、箸を父と母が持ち、僕の言葉を待っている。

箸を持つ右手が震えた。みんなあの一言を待っている。僕は必死に探した。

小さな骨の欠片を差し

「この黒くなってしまった骨が、分かりにくいかも知れませんが喉仏です」

安堵のため息が漏れて、それと同時に母親の鳴き声が響き渡った。

父親と母親は箸を持ち、一番大きな、それでも小さな骨を持ち上げ、そっと青磁色の骨壺に収めた。

続いて女の子と祖母が、そして親戚がそれを終えると、僕はなるべく丁寧に残りの骨を収めた。最後にはなるべく骨の欠片が残らないように、ヘラで掬って骨壺の蓋をした。

その骨壺を母親は胸に抱きかかえて、僕にお辞儀をした。親戚の誰かが、僕の手心に心付けの入った封筒を押しつけてきた。断っても断っても、その男は引こうとしない。

この仕事を始めたばかりの時に重さんに言われたことを思い出した。

「心付けはな、渡す方の人間の自己満足なんだよ。たとえ律儀に断り続けたって、俺らの仕事はみんながみんな、こんな風に金をもらっていると思っているんだ。だったら、貰っておけばいい。嫌な気がしたなら、その金で花を買って、仏さんに手向けてやれよ」

僕は、黙って受取り、小さく帽子を下げて目元を隠した。施しを受けているわけではない。それなのにみじめな気分になるのは、どうしてなのだろうか。

つぐむさんがワゴンを片付けに来てくれた。一緒に裏に戻ると、僕はぼち袋を握りしめて止められない涙をこぼした。

あの骨は、喉仏ではありません。僕は嘘をつきました。そうやってしまいたい。あの安堵の空気を破壊する一言を。つぐむさんは黙ってワゴンの上を掃いた。キラキラと光る小さな骨の欠片舞った。

「燃えてしまうんだよ。脆い骨だからな」つぐむさんはそう言うと、僕が泣いているのを見ないように下を向いたまま、コーヒーの話を始めた。

つぐむさんは初めて貰った心付けで最高級のコーヒー豆を買ったらしい。

「でもな、後悔してんだ。ブルーマウンテンの味が、分からなくなっちゃった。何を飲んでも、しょっぱく感じるよ」

僕は、ただ、頷いて涙が止まるのをジッと待った。

帰りの車でも、時々目の前が曇るので何度か停車を繰り返しながら、いつもの二倍の時間をかけて家に戻った。家に着くと、目のまわりがヒリヒリしていた。お風呂で顔を洗うと滲みて滲みてまた涙が零れた。

その日は葬儀が一件のみで、ゆったりした日だった。翳雲が見事で、携帯のカメラで三枚撮影してみた。この仕事を始めてから、空を眺めることが増えた。いつの間にか雲の種類を覚えていた。重さんやつぐむさんに教わったのだ。彼らもきっと、空を見上げることが多いのだろう。その気持ちが、僕には痛いほど分かる。

熱いお茶を事務の女の子に淹れてもらい、それから次の大安に映画を見に行く約束をした。

駐車場の方角から、大きな悲鳴が聞こえて、僕らははじかれたように走り出した。

重さんの声だったのだ。

表に回ると、重さんは裁ちばさみを手にアスファルトの上で倒れていた。

周りには切り落とされた枝が散乱している。あの女の子の怖いと言った木を、高い脚立を使って伐採していた。

「だから、業者を頼むから待てと言ったのに」つぐむさんは重さんの脇にしゃがみ込み、大きな声を出した。

重さんは苦々しく笑ったり、腰を痛がったりしながら救急車が到着するのを倒れたまま待った。少しも動けない、そう言って、うっすら涙を浮かべた。

「素人がそんな高い場所の、太い枝を切り落とすなんて無茶よ」

事務の女の子は、救急車が来るまでのあいだ、重さんと門の間を行ったり来たりして気を静めていた。このまま、腰が原因で動けなくなったら。誰も口には出さないが、同じ不安をもっていることが、わかる。

「僕がやればよかった」

つぐむさんが僕の脇を突いた。

「僕が、女の子が嫌がっていたのを直接聞いたんだから、僕がやればよかった」

繰り返すと、今度は重さんが右手を左右に小さく振った。

救急隊員は重さんの体をそっと担架に乗せて運び去った。一番近くの市民病院に運ばれるというので、僕は事務の子の映画のデートを断り、つぐむさんと重さんのお見舞いに行くことに決

めた。

真っ白い壁に、白いシーツ、白い布団。どうして病院は全てを真っ白にして包み込みたがるの
だろうか。日当たりのいい四人部屋の窓際に、重さんのベッドはあった。窓際には髪の長い女性が
一人座って小さな声で笑っていた。僕らに気づくとその女性は小さくこちらに会釈をしてから、
重さんに何か耳打ちをして、軽い足取りで部屋を出て行った。

すれ違いに、長い髪から日溜まりの香りがした。きっと長い時間重さんと一緒にいたのだろう
。そう直感した。綺麗な人だ、と思った。僕より大分年上に見える。眼尻の小さな皺が、愛ら
しかった。

重さんの話では、骨に異常はなかったものの、三週間ほど安静にして、二週間のリハビリが必要
だという。退職を前に、初めての長期休暇をとってしまったと、申し訳なさそうに頭をかいた。

仕事に大分慣れてきた僕は、つぐむさんと二人でも上手く仕事をこなした。たくさんの骨を見
てきた。小さい骨から大きい骨。抗がん剤で色が染まった緑色の骨、綺麗な乳白色の骨。仕事に
なれるに従って、ゲームはやらなくなった。ゲームが命を軽んじているとか、そんな難しいこと
は考えていない。ただ、電源を入れる気分にならない、それだけのことだ。

「重さん、さっきの女性は娘さん？」

一通り入院生活の話を聞き終えて、つぐむさんが気になっていたことを聞いてくれた。

「そうなんだ。面倒みてもらってんだ」

お見舞いに持ってきたプリンを、こぼさないように注意しながら口に運び終わると重さんは色々
と一人言とも取れることを言い出した。

定年退職する前に、首になっちゃうと退職金は出なくなるのだろうか。どんなことをすると首
になるのだろうか。

つぐむさんと僕は、重さんの言葉の真意が分からず、ただ余計なことをして今の時期に首にな
るのは、避けた方がいいし、何をしようとしているのかを聞かなければ答えようがないと、次々
に同じようなことを繰り返し言った。

「俺が退院したらさ、一度だけ、火葬を手伝ってくれないか」

重さんは、重々しい口調で僕らの目を交互にすぎる様な眼で見つめた。

「何を、火葬するつもりなの」

つぐむさんは、低い声を出した。病院で火葬の話なんて、縁起でもないのだ。

「さっきの、俺の娘はさ。亭主が行方不明になったんだよ」

僕等は顔を見合せて、それから静かに重さんの声に耳を傾けた。

「ばか亭主がいなくなっても、娘は帰って来るもんだと待ち続けてんだ。俺は戸籍の付表をと
った。付表っていうのはな、転居先がすべて明記されているんだ。駄目もとで役所で抜いたらな
、西に、東京を飛び越えて西に行ってたんだよ」

「どこですか？」

「神戸の、三宮だよ。三宮で二回も転居をしていたんだ」

「お譲さんは知ってるんですか」

つぐむさんは身を乗り出して話に加わった。

「俺はな、あいつを追いかけようと思った。あいつの両親はもうこの世にいないから責めようもねえし、娘一人に辛い思いをさせているのも許せねえ。いろいろ調べると、その三宮の小さなアパートは新興宗教団体の寮になってたんだ」

僕は、思いがけない展開に手に汗を握った。

「ところが、大地震が起こったんだ」

つぐむさんは小さなため息をついて、勝手に重さんの小さな冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し飲み始めた。僕は、唾を溜めて飲み込んだ。

「遺体なんて、誰のものか分かんねえし、そもそも何で宗教団体に入ってしまったのかもわからない。娘は、あいつの死を認めなかった。今でも、待っている。でもな、あいつは、あの震災でいなくなったんだ。俺は何度も話して聞かせた。付表を見せて、大震災の現状を話して聞かせて、それでも娘は認めなかったんだ」

そこまで話すと、重さんは少し顔を歪めた。僕は、もう寝た方がいいと電動ベッドをフラットにした。

つぐむさんは、とにかく燃やすものによっては協力すると答えた。僕らは病室を後にした。病院から駅への道すがら、僕らは重さんの娘さんが燃やそうとしているものを、あれこれ思案した。

「件数が多い日にやれば……余熱で燃えるものだといいな」

つぐむさんは顎に手を添えたまま、小さく口を動かした。僕は、はい、と返事をした。

若い僕らが一緒にやれば、二人とも首になることはないだろう、そう思った。

師走に入って三日目に、重さんは職場に復帰した。歩く時にまだ痛いらしく、腰にはコルセットを巻いていた。僕はその日の日報に、赤ペンで祝復帰と大きく書いた。

その日は大わらわだった。重さんは、朝から緊張の面持ちで、珍しく式の段取りを間違えた。「久し振りの現場復帰だから、許してくれよ」と笑ったが、重さんがミスしたのは、娘さんの火葬が気になっていたからに違いなかった。僕とつぐむさんはいつもより、スマートに仕事をこなした。

三台ある火葬炉がすべて稼働していた。控え室には常に誰かがいて、常に鳴き声がホールに響いていた。

黒いコートを取り違えてゆく人が多く、事務の女の子はその対応で大わらわだった。忘れものも多い。メモ書きに「沢村家」だの「木村家」だのと書いて、忘れものに貼り付けて保管していた。

すべての式が終わり、待合室の照明が落とされてから、重さんの娘さんが紙袋を持ってやって

きた。一台だけ火葬炉は稼働したままにしてある。僕らは娘さんに挨拶をして、紙袋の中身を台車に乗せてもらった。

小さな桐箱が一つと、古いワイシャツが一枚。それから、プラチナのシンプルな結婚指輪が二つ並んでいる。

「無理言ってすみません」

娘さんは僕らに深くお辞儀をして、重さんを見た。

重さんは黙って火葬炉の裏に回った。

ワゴンを火葬炉に入れる。

「お別れのボタンをお願いいたします」

つぐむさんの低い声がホールに開いた。娘さんは迷いなくボタンを強く押した。

ホールの脇にあるソファに腰掛けて、僕ら三人は重さんが燃やし終えるのを待った。

「一瞬で燃えてしまいますよ。指輪以外は」

つぐむさんはそう言って、お茶を取りに事務室へ戻った。

「あの桐箱の中には、あの人のへその緒がはいっているんです」

僕の斜交いに座った娘さんは、真正面の空を見つめたまま話出した。

「あの人の、母親から預かっていました。生まれた時の証だから、とってわたしに手渡してくれたんです」

何も言わずにただ、首を縦に振った。

「戸籍上は、とっくにあの人は死んでる。でも、わたしの中では、生きている。父は、そのわたしの気持が不憫で仕方なかったのでしょうか。よく、衝突しました」

つぐむさんは四つ湯呑を持ってきてくれた。

「ほんとはお前が動くべきなんだぞ」

そう言って、一番色の薄い湯呑を僕の前に置いた。

「重さんが、裏から指輪だけ持ってくるそうだよ」

つぐむさんがそう言うのとほぼ同時に、重さんは変形した小さな煤けた輪を二つと小さな骨壺を、トレーに乗せて運んできた。

「俺にとっては、めでたい葬式だ」

ぶっきらぼうにそう言うと、娘さんの前にトレーを置いた。

娘さんは、箸で小さな指輪を掴むと骨壺に落した。

陶器と金属のぶつかる澄んだ音がホールに響いた。

もうひとつ。

娘さんは涙を浮かべながら、指輪を骨壺に落とす。

再度、澄んだ音がホールを包んだ。

骨壺に蓋をすると、やっと終わった、と呟き、僕らに頭を下げた。

「もしも、もしも生きていたらどうしますか」

つぐむさんが声を出した。

重さんは苦々しく睨みつけ、僕はいつかやられたのと同じように、脇を突いた。

「わたしの中では、もう亡き夫ですから」

娘さんは微笑んでそう答えた。

僕は後片付けを引き受けて、重さんと娘さんを見送った。

「名前は、なんて言うんですか」

僕は、車に乗り込む娘さんに声をかけた。驚いたように目を大きく開いてから、少しして「かの子です」そう言って、ふわりと笑った。

「火葬ってさ、日本人の宗教的感情に適合しているんだとさ」

「はあ」

「姿が変わるとさ、やっと踏ん切りがつくってことだよ」

「誰がそんなことを言ったんですか」

「……法律」

僕はさっさと片付けを始めるつぐむさんに付いて、火葬炉を片付けた。掃除機は明日にして、今日はコーヒーを飲みに行こう。そういうつぐむさんの意見に僕は大賛成をして、湯のみを大急ぎで洗う。

明日も、たくさんの悲しみが僕の仕事を包みこみ、たくさんの涙が降り注ぐ。その傍らにいる僕らは遺族の影だ。

僕らは、静かに職場を後にする。

僕らは、そろって空を眺める。

「明日も晴れだな」

降りそうな星空を見て、つぐむさんが目を細める。

僕は空を眺めたまま、小さく頷く。

「いこうか」と素早く、つぐむさんは車に乗り込む。

僕も自分の車に乗り慌ててエンジンをかける。

つぐむさんの車を追いながら、僕は「かのこ」という名前を呟いた。